

「お姉ちゃん」って呼ばれた日

北杜市立甲陵高等学校 3年 前橋 真子

「お姉ちゃんは、いつも頑張ってて偉いね？」

妹が生まれてから、私は「しっかり者」として見られることが増えた。親戚、近所の人、先生たち。すごく嬉しいはずなのに心の奥がそっと冷える言葉。わかってもらえているはずのことがこんなに心細いなんて。

私は「SODA」だ。“Sibling Of Deaf Adults/Children” —『難聴のきょうだい児』をあらわすこの言葉にある雑誌で出会った。胸がざわつく。自分に特別な名前がつけられ、「みんなとは違う」「普通ではない」と言われる気がした。私は他の誰とも変わらない、どこにでもいる普通のお姉ちゃんなのに。私の妹は音が聞こえない、それだけなのに。

自分と同じ境遇の友人と出会ったのは昨年夏。手話を使うと感じる冷ややかな視線。「妹のこと、しんどくない？自分を大切にね」分かったような顔でかけられる言葉。みんなから見える私は「妹のお姉ちゃん」でしかないこと。本当の私は誰にも知られず、ひとりぼっち。胸の内に抱えた想いは同じだった。

私の妹は普通学校に通いたいという希望を叶えるため東京の大きな病院で人工内耳の手術を受けた。手術直後は「おはよう」の一言すらうまく言えなかった。口の形を何度も真似しても、言えない。夜、泣きながら悔しがらる妹を何度も見た。それでも妹は毎朝「おはよう」と笑って言い続けた。そんな妹が初めて「お姉ちゃん」と呼んでくれたときは家族みんなで泣いて喜んだ。今、妹は普通学校に通い、障がい者を隠さず否定せず、自身の世界をまっすぐ歩んでいる。そして、そんな妹の努力を一番近くで見て知っているのは私だ。

私はそんな妹と一緒に、けれど、私だけの世界を歩んでいる。耳の聞こえにくい子どもたちのリトミックでのボランティア、最近では私の大好きな演劇を通じ、難聴の子どもたちとの交流会を開くことも始めた。劇は手話が第一言語だが、健聴者の観客も多い。誰もが引き込まれる理由はただ一つ、子どもたちが真剣に自分の役に向き合っていて心から楽しむ姿からだ。言葉を超えて心で伝え、手を取り合っているのを見て、哀れみの目を向ける人はいない。キラキラした笑顔は希望そのもの。どんな有名な劇場よりも素晴らしい舞台、未来の光がそこにはあると私は誇らしく思う。

昨年の秋、アメリカからの留学生をホストファミリーとして受け入れた時のことだ。彼はアメリカで学んだ米国手話を使って私の妹に一生懸命話しかけた。私も妹も米国手話は分からない。でも不思議と彼の言いたいことが分かった。そこには言語の壁もハンディの壁も超える彼の姿があった。英語では、障がい者を disabled people ではなく people with disabilities —「障がいと共に生きる人」という言い方をすることが多いそうだ。障がいという属性に先に目を向けるのではなく、その人自身にまず目を向ける。きっと私は「きょうだい児」として括られている自分を感じていたのだ。だからこそ、この、人に焦点を当てて区別しない捉え方に、私の中の何かがふっと軽くなった気がした。

今、世界を見渡すと様々な差別が存在する。「自分とは違う」「可哀想」—そんな何気ない区別や先入観が、差別や生きづらさに繋がることもある。一億二千万人の日本だけでも、三人に一人が障がい・高齢・病気など何かしらの『生きづらさ』を抱えているとも言われている。世界を見渡せば、ひとりひとりに違いがあるのは当たり前、それが普通だ。だからこそ、違いを理由に壁をつくるのではなく、正しく理解しようと互いに手を伸ばし合う社会であるべきだ。

私はSODA。でもそれは「難聴の誰かのきょうだい」だけを意味する言葉ではない。それは、大切な妹と歩んできた証であり、私という人間の確かな軌跡、バックグラウンドなのだ。妹は私に世界の広さと優しさを教えてくれた。その世界の中で私は、私にしかできないことを探し続けている。妹が初めて「お姉ちゃん」と呼んでくれた日、私は姉としての強さをもらった。二人で涙を流すほど笑った日もけんかした日も私の力になっている。それこそが私の原点なのだ。

日本にいるきょうだい児はおおよそ 666 万人。決して少なくない。障がいのある方々が声を上げた時のスローガン、Nothing About Us Without Us。「私たちのことを私たち抜きで決めないで」。これはこの世界に生きるすべての人々に通ずる言葉だ。私たちの小さな理解の積み重ねこそが、見えない壁を壊しつながりを生み出していく。

だから私は今日も伝え続ける。「お姉ちゃん」と呼ばれた日から始まった私の歩みを。SODA として、姉として、そして前橋真子として。この声が、あなたの心に届くと信じて。